アレクサンドリアのアホワ(伝統的喫茶店)における出稼ぎ労働者ネットワーク：173～181. 2005

研究ノート

アレクサンドリアのアホワ(伝統的喫茶店)における出稼ぎ労働者ネットワーク[1]

岡戸　真幸

本研究は、アレクサンドリア市における出稼ぎ労働者の職住獲得過程において、どのような社会的ネットワークが駆使されているかをフィールドワークに基づき検証する。この過程における社会的ネットワークとして、論者は、従来の研究より都市における出身県、郡、村単位の地縁的ネットワークとアラビア語で「家族」を意味するアーイラ[2]によって作られる血縁的ネットワークの二つに注目して研究を進める。その両者が出稼ぎ労働者の生活にどのように関わっているかを探ることにより、彼らが自分の出身地を離れていかに働き、生きているのかが見えてくる。特にエジプトにおけるアーイラは、単に「家族」と捉えるには規模の大きな集団であり、その集団に属することで発生する連帯意識が都市の出稼ぎ労働者の職住獲得過程に与える役割を見ていく。

今回は、アレクサンドリアにおける出稼ぎ労働者のうち、主に建築で働くコンクリート工に焦点を絞った。彼らの具体的な仕事は、ビル建築におけるコンクリート工事であり、ジャリと砂とセメントが混ぜ合わされたコンクリートを、台車を用いて木の型枠に流し込む作業に従事している。コンクリート工は、他の仕事に比べると技能のいらない単純労働であり、かつ後述するようにある程度の人海戦術で仕事を進める必要があるので、一回の仕事で多くの出稼ぎ労働者が共に働くことになる。このような集団の中で、彼らがお互いにどのような関係性にあるかに注目することから、彼らが都市における社会的ネットワークをいかに活用しているかについて理解する糸口ができる。

彼らの出身地は、様々であるが、ここではソハーグ県のある村出身のキリスト教徒（コプト教徒）アーイラを事例として、彼らがアレクサンドリアで働く様子を見ていく。彼らは、単身でアレクサンドリアに出稼ぎに来ており、一人の同じアーイラ出身のムカーウィル（建築請負業者）の元に集い、働いており、一つの現場で働くコンクリート工の大半が同じアーイラの成員として、お互いに何らかの関係を持っている。

論者の長期的視点としては、都市への出稼ぎ労働者が、都市の中であるいは都市と彼らの出身地の間で作るネットワークがどのようなものであるかを考えることである。そのため、都市における公的な地縁的組織である同郷者団体と公的ではない人々の集まりの場であるアホワ（伝統的喫茶店）の二つを拠点として、出稼ぎ労働者のネットワークを観察することを試みたが、調査における時間的制約のため、アホワを中心とした出稼ぎ労働者のネットワークを調査するにとどまった。特に、論者が今回接見したムカーウィルは、キリスト教徒であるが、彼らが同郷者団体のような都市における公的な地縁的組織を作ることが

なく[3]、自らの地縁と血縁を駆使して、仕事を得ていることは今後の調査において、有効な事例となると考えた。

将来的に同郷者団体に加入するイスラム教徒との事例の対比を行うことで、アレクサンドリアにおける出稼ぎ労働者がどのような社会的ネットワークを持って、仕事を獲得しているかについて、より詳細な調査を計画している。

アレクサンドリアにおける出稼ぎ労働者と彼らのネットワークに関する先行研究は、[長沢　1991] において、港湾労働者を事例として扱ったものなどがあるが、全体的に乏しく、また近年の状況を報告する資料は少ない。以下、フィールドにおける観察を詳細に報告し、それを元に論じていきたい。

コンクリート工の仕事風景

出稼ぎ労働者は、朝の６時過ぎに、アレクサンドリア市の鉄道終着駅であるマスル駅前のアホワ（伝統的喫茶店）に集合する。来る途中で買ったサンドイッチなどで朝食を済ませ、紅茶を飲みながらムカーウィルの声がかかるまで待機する。７時前にムカーウィルの合図と共に彼の元に集合し、工事現場へ貸切のマイクロバスで向かう。仕事は、昨夜のうちに同じアーイラに属するムカーウィルから声をかけられて決まっていた。

７時過ぎに現場に到着した後は、作業着にすばやく着替え、仕事を開始する。作業着といっても決まった服装はなく、地上階でのジャリや砂を運ぶ作業員には、はだしで仕事をする者もいる。また、最上階でのコンクリート運びをする者は、ゴム長靴を履くが靴下の代わりに捨てられているセメント袋を器用に足にまいてその上から長靴を履いている。セメント袋は、工事現場で即席の日よけ帽子に利用されるなど彼らの創意工夫のもとに再利用されている。そして、日本の工事現場のようなヘルメットは存在せず、強い日差しや飛び跳ねるコンクリート片をよけるために帽子をかぶる者もいるが、無帽のまま作業する作業員も多い。

仕事は、建物の最上階と地上階の２班に分かれる。地上階は、コンクリート攪拌機にジャリ（３～４人）、砂（２～３人）、セメント（１人）を入れる作業と機械操作（２人）にさらに分かれ、最上階は、台車でコンクリートを受け、その台車を押してコンクリートを流し込む人（３人）とコンクリートの慣らしをする人（２人）といった分担になる。攪拌機で作ってワイヤーで最上階に上げるコンクリートは、種々の材料を混ぜ合わせることによって、一回当たり100kg近い重さになるため、台車の重さでへこんだ床の鉄枠に車輪を取られ、３人がかりでも思うように進まない時もある重労働である。

この作業自体は、最上階の床にコンクリートを流し込む時の作業である。床にコンクリートを流し込んだ後に、柱用の型枠を木工が作り始めるので、次のコンクリート作業は、だいたい３日後になる。その柱用の型枠にコンクリートを流し入れる時は、鉄製の盆にコンクリートを乗せ、それを肩に担いではしごで柱用型枠の上方まで登ってコンクリートを流し込む。柱の大きさにもよるが、大きな柱で30分ほどの時間がかかる。この作業に従事する人（２～３人）とコンクリートをシャベルで盆に乗せる人（２人）が床作業時の人員に加わる。総人数は、一日の作業でコンクリートを一つの階に均等に流し終えなければならないため、その建物の大きさによって左右されるが、平均して13～15人が作業に従事している。また、建物の床面積が大きい場合

は、上階の台車を２台に増やして効率を上げるなどの流動性はある。

13時頃の昼食休憩まで、ジャリ、砂、セメントなどの材料が足りなくなり、補給される間などに休憩できることがたまにあるが、普通は途切れなくそれらが補給され、昼食時を除いて一日中休みなしで働くこととなる。昼食は、エーシ（エジプト製の種なしパン）に、フール（そら豆の煮込み)、生玉ねぎ、ゆで卵、トマト、フライドポテト、そして砂糖のたっぷり入った紅茶である。45分ほどの休憩の後に、仕事再開。16時頃に、仕事終了。それより前に、その日にやるべき量の仕事が終わっていれば、早くに仕事が終わることもあるが、逆に終わらないと16時以降も働くことがある。16時より早くても遅くても日給であるため、給料は変わらない。ただし、16時以降超過して働く時は、翌日の午前中などに早めに機械を撤収しなければならないなどの理由があるためであり、その機械の撤収と同時に早めに作業が終わる翌日も働くことで前日分の超過が埋め合わせされる。

仕事終了後は、給料がその場で支払われ、三々五々解散していく。ただし、彼らは、ほとんどムカーウィルと同じ村出身でかつムカーウィルと同じアーイラに属する人間なので、手持ちがないなどの理由でその場で払われるのではなく、その日の夜にアホワで支払われることもある。むしろ、マスル駅前にあるアホワでたまたま声をかけて雇うことになった、ムカーウィルとはアーイラなどの近親関係がない出稼ぎ労働者たちが給料の支払いでは優先される。このように約9時間近い労働の末に獲得される彼らの給料は、仕事内容によって、25ポンドから35ポンド[4]と幅がある。

コンクリート関連の仕事が、一つの工事現場で毎日あるわけではなく、また定期的にあるとは限らないため、１人のムカーウィルはいくつかの工事現場を掛け持ちして仕事を増やし、出稼ぎに来ている近親者に差配している。

一つの工事現場では、彼らコンクリート工に関わる職人として、鉄工と木工が存在する。木工がビルの型枠を作り、そこに鉄工が骨組みを張り、そして彼らコンクリート工がコンクリートを流し込む、といった手順がビル完成まで繰り返して行なわれる。コンクリート工の作業は一日で終了するが、他の作業は、製材の確保、加工などで３～４日かかる。また、コンクリートが流し込まれる前に電気関係の配線が行なわれる。特に、鉄工は、大量の鉄材を加工して、最上階まで運ばねばならないために作業に時間がかかる。対して、木工は、コンクリートが乾き次第、型枠を外して次々階（コンクリートの乾き具合などを勘案して）へと木材を流用するために、鉄工に比べて比較的に作業が早い。

時間がかかるのは、床を作る作業で、柱用の型枠にコンクリートを流し込んだ後に、作り始める。一つの階にコンクリートを流し込み建物の基礎を完成させるのに、約２週間と言われているが、実際に、2005年９月中旬から10月中旬までのあるビルで行われたコンクリート工事の日程をおってみると、９月10日(床)、９月14日(柱)、９月27日(床)、10月４日(柱)、10月12日(床)、10月18日(柱)といった日程で進んでおり、間隔が一定ではなく、１週間以上も仕事がない時もあることがわかる。これには、鉄工職人の作業が遅れたり、コンクリート担当のムカーウィル自身が他の現場を抱えており、コンクリート撹拌機を動かすことができないためであったりと様々な原因が重なるからである。

このため一つの現場の仕事だけでは暮らし

ていけず、論者が聞き取りしたあるムカーウィルは、４ヶ所の現場を抱え、多い時で、週４日の仕事を労働者に差配していた。さらに、出稼ぎ労働者たちは、自分のアーイラ出身の他のムカーウィルなどを頼り、仕事を増やしていた。ただし、上記のような間隔でコンクリートの仕事があるため、全ての現場がうまく組み合わさって労働者に毎日仕事を提供することは難しく、まったく仕事がない日もある。そのため、彼らは日曜日などの休日でも仕事があれば働く。

このように、一つのアーイラに属するムカーウィルと出稼ぎ労働者は、共同でコンクリート作業に従事する一つの集団であるように見える。これが、現代社会において、単に「家族」として捉えられないアーイラが果たす役割の一つであると考えられる。

アホワ（伝統的喫茶店）の機能

エジプトにおいてアホワは、単にその中でお茶を楽しみ、テレビを見、種々のゲームを楽しむという以上に出稼ぎ労働者にとって情報収集の場としての機能を果たしている。論者が集中的に調査したアレクサンドリア市の出稼ぎ労働者集住地区のある通りは、マスル駅からマハムディーヤ運河へ向けて、10分ほど歩いた場所にある。その通りには、16軒のアホワが通りの両側に連なり、夕方以降になるとエジプトの伝統的な衣装であるガラベーヤを身につけ、頭にターバンを巻いた多くの上エジプトからの出稼ぎ労働者が集まる。この地区は、上エジプト人が多く集まることで地元でも有名な場所である。

今回の調査において、主に通ったアホワは、その中の一つであり、ソハーグのある一つの村出身のキリスト教徒である出稼ぎ労働者が多く集う場所である。そのアホワは、運河に近い通りの端の方に位置し、キリスト教会に近い。店の主人は、イスラム教徒であり、店名は彼の父の名が付いている。そのアホワにいる７人の同じアーイラ出身のムカーウィルが、仕事を同村出身者に差配している。彼らムカーウィルは、夜にアホワにおいて、同村出身者や特に自分と同じアーイラの人たちなどなじみの人たちに、翌日の自分の仕事に来ないか声をかける。このため、アホワに毎日顔を出すことは、彼らにとって娯楽のためであると同時に翌日の仕事を獲得するために必要な行いとなっているのである。

また、仕事は、マスル駅前の別のアホワに朝の６時過ぎ頃、訪れることによって、その場に来るムカーウィルを通じて獲得することもできる。ムカーウィルたちがアホワを集合場所とするのも、当日までに集まらなかった欠員や予定していた人員を確保するのに都合が良いためであると思われる。朝の６時過ぎのマスル駅前のアホワは、ガラベーヤを着た仕事を求める人たちが大勢集う場所となる。しかし、こうして集まった全ての人たちが確実にその日の仕事を得られるとは限らない。このため、前夜の内に、自分のなじみのアホワにおいて、近親者のムカーウィルから仕事を獲得しておいたほうが確実である。同時に、ムカーウィルが自分の近親者に仕事を斡旋するのは、コンクリート工事が決められた時間内に作業を終了させる必要があるために、作業慣れした信頼できる作業員を確実に確保するためであると思われる。

アホワは、彼らムカーウィルが仕事の打ち合わせをするのにも使われる。特に、ムカーウィルが所有しているコンクリート撹拌機は、他のムカーウィルに貸し出されることもあり、その際の交渉をアホワで行うこともある。機械を貸し出す時に、機械の操作及び設置担当

者として、自分と同じアーイラから労働者を派遣することもある。

同じ村出身者は、一つのアホワに集まる場合が多く、アホワの前から定期的に彼らの村との間を往復するマイクロバスが出ている。このマイクロバスは、彼らの村での家の前まで運んでくれる。このことから、彼らの活動範囲は自分たちの出身村とアレクサンドリアのアホワという二点を結ぶような非常に狭いものになってしまいがちであり、日常品も近場で全て手に入ることから、彼ら出稼ぎ労働者は、仕事関連で出る以外は自分の住んでいる地区の外であるアレクサンドリアの市内にほとんど出ることがなく、仕事以外の時間をこのアホワと自分のアパートの部屋とで過ごすことになる。それは、前述の仕事風景の項で見たように、彼らの日常が早朝から夕方までの肉体労働によって構成されており、夜はアホワでの仕事探しを含めたつきあいがあるからでもある。

彼らのうち特に結婚資金を貯めるなどが目的の人たちは、仕事のためにアレクサンドリアに来ており、この都市に順応することはなく、自分たちの村の延長線上として、都市を位置づけているのである[5]。同時に、新たに出稼ぎ労働を計画する者にとっても、こうしたマイクロバスによる彼らの地元と都市との結びつきは、出稼ぎ場所に関する情報が入手しやすいこともあり、出稼ぎ場所選択に大いに貢献すると思われる。

社会的ネットワーク

論者が接見した一人のムカーウィルは、現在新しく同僚と共に土地を買って、事業主となりビルを建て始めており、単なるコンクリート専門のムカーウィルから一歩前進しようとしている。周囲は、彼のことを親方（ムアッリム）と呼んでいるので、以下具体的に彼について述べる時はそれに従う。

一つの建築現場で作業するコンクリート工の大半が親方と同じアーイラを基本として何らかのつながりを持った同村出身者で構成されている。親方のアーイラは、彼の６代前の先祖を起点としているものであり、ソハーグの彼の村に100家族（ウスラ[6]）ほどがおり、アレクサンドリアには、12家族が住んでいる。彼のアーイラは、アレクサンドリアに出稼ぎに来ている３つの同村出身者のキリスト教徒アーイラの中では、一番大きい。

働いている労働者間のつながりは、６代前の先祖の３人の息子から分かれて広がる系図のどこかに位置するといったもので、アーイラ成員同士の記憶の中では明確に互いの関係を辿ることができるが、それは父方オジ（アンム）または父方のイトコ(イブン・アンム)といった名称に単純にまとめられてしまう。彼らにとって、このような関係は、同じアーイラであるということ以上に意味を持つことはない。むしろ逆に、親方の母親は彼とは異なるアーイラの出身であるが、その母方を通した近親者は、母の兄弟の子であるなど、具体的な近い範囲の系図で辿ることのできる関係にある者が彼と共に働くなど、個々の関係は出自集団である父方に比べ理解しやすい。

母方のつながりは、婚姻によって成立した姻族関係にあり、父方よりも身近な者たちで構成された関係であると考えられる。それは、親方の仕事を中心的に手助けしているのが、彼の弟と母方のイトコたちであることからも解る。また、彼の現在の仕事の一つを世話したのが、彼の母方の祖父の子（母方オジ）にあたる人物であることからも、母方のつながりが父方と異なった役割を果たし、重要であることが理解できる。

親方にとって、コンクリート工として雇う人間として、まず自分のアーイラの人間及び自分の母方の親族がおり、次に同じ村の出身者を雇い、その次に人がいなければ、マスル駅などで見つけた日雇い労働者、中でも自分と同じソハーグ出身の人間を雇うといった順番になっている。これが、彼にとっての親密さの基準である。

親方の日常生活

親方は、現在35歳であり、15歳の時に学校の休みを利用してアレクサンドリアに出稼ぎに来たのが最初だった。それ以降アレクサンドリアとソハーグを行き来する出稼ぎ労働者として働いて20年になる。

カイロを選ばずにアレクサンドリアに来たのは、彼の父方のオジがこの町で働いていたからである。現在の住居は、不動産屋に紹介してもらった物件であるが、アレクサンドリアに来た当初は父方の親類たちと一緒に住んでいた。親方は、男３人女1人の４人兄弟で、次男であり、既に結婚して単身出稼ぎに来ている弟も彼と一緒に働いている。彼自身は、まだ独身であり、最初の調査の後に婚約破棄をしたため、今は婚約者もいない。

彼が、単なる出稼ぎ労働者から、ムカーウィルになったのは４年ほど前であり、コンクリート撹拌機を購入したのは、３年ほど前である。出稼ぎ労働者からムカーウィルになるために必要なものが、このコンクリート撹拌機であると考えられ、彼はこの機械を購入することにより、人を集めて、工事現場を差配するムカーウィルになり、収入が増えたのである。コンクリート撹拌機は、５万ポンドで一緒に働きにきている弟と共に購入したそうであるが、彼らの日給が最大で35ポンドであることを考えると、かなりの金額であることが解る。実際に、彼がこの機械を購入するまでに約17年かかっていることからも、それはうかがい知られる。

親方の日常は、仕事のある日は朝の６時半頃にマスル駅前にあるアホワに出かけ、その日の作業に必要な人員が予定通り来ているかどうか確認し、来ていない者についてはその所在を尋ね、彼が来られないようなら、その場で仕事を探している労働者に新たに声をかけて、人員を補充する。その後、彼らと共に工事現場に向かい、終日労働者を叱咤激励したり、なまけている労働者の前で時には見本を示したり、作業が遅れている時は自ら働くこともある。親方は、工事現場において、他の木工や鉄工を率いているムカーウィルやビルのオーナー、設計者など複数の人間達と工事の進捗状況などを話し合ったりするので、多忙である。昼は、労働者とともに食べ、ときには彼が食事代をおごる時もある。

４時の作業終了後に、労働者に給料を払い、皆、同じ地区に住んでいるので、彼らと共に帰宅する。その後は、夕食を外で食べたり、アホワでその日のお茶代をかけてドミノをしたりして過ごしたりする。翌日に仕事がある場合は、アホワに来る同じアーイラの人や同村出身者に仕事に来ないか声をかける。また、現在自分が事業主になっているビルの進捗状況や必要経費などの計算を同僚と行ったりもする。親方の通うアホワとして、同じ通りに親方と同じソハーグ出身者が集うアホワと同村出身者が集う別のアホワの２軒があり、彼はそれらの間を行き来しながら過ごし、深夜に帰宅して寝る。

このように親方は、一日の大半を部屋の外で過ごす。彼の部屋は、一間しかなく、基本的に寝る以外帰ることはない。食事も外食が多いため、部屋の片隅に簡単なお茶が沸かせ

るくらいのコンロが置いてあるだけであり、他の調度品といえば、テレビとベッドと小さいタンスに電話機があるだけである。ただし、多くの労働者が何人もの自分の親類たちと狭い部屋で一緒に住んでいることを考えれば、一人で住んでいることは、それなりの経済力があることを示している。

出稼ぎ労働者ネットワーク研究の展望

本論で述べてきた情報は、論者が接見した一人のムカーウィルを中心に、彼を取り巻く人々を通して得られたものである。彼らは、都市において自らの地縁的血縁的ネットワークを駆使することで仕事を得ている。そして、都市におけるその生活は、それらのネットワークを駆使した結果、自らの村の延長線上に位置する場所で行われているものとみなされるようになり、両者が異なる場所であるというような社会的断絶を感じさせることはない。これには、出稼ぎにつきまとう新たな場所での情報収集や慣れない環境で感じるストレスなどを軽減する利点があると考えられる。

しかし、それは都市に持ち込まれた彼らの出身地での社会的ネットワークによって、都市の中に新たに作られた都市とは異なる空間の中で行われていることなのである。このネットワークには、まず全体として、父系の同じアーイラであるという意識と共に、個々の人間が持つ母系の近親者への意識という血縁的な結束性が地縁的なそれに優先され、仕事その他の情報がこのネットワークに連なる人々の口を通して広がっていくという特徴がある。そのため、この外に位置する都市の人たちは、なかなかこの空間に入り込めず、その全体像が見えてこない。アホワは、それらのネットワークの拠点としての役割を出稼ぎ労働者に供しているのである。

ジャネット・アブー＝ルゴットは、カイロの出稼ぎ労働者を事例として、地方人口の流入によって引き起こされる都市の文化変化を「都市の農村化（ruralization of the cities)」という概念として提出した[7]。しかし、上記の事例から、アレクサンドリアにおける出稼ぎ労働者は、都市の文化に影響を与えるような生活を都市で送っておらず、むしろ彼らの狭い生活範囲を考慮すると、都市と隔絶した社会を都市の中に形成しており、文化変化を引き起こしていないと考えられる[8]。

研究は、今後同郷者団体の調査を行っていき、アホワとの比較の上で、改めて議論をしていくが、同じ出稼ぎ労働者の拠点としてどのような違いがあるか調査し、同郷者団体が「都市の農村化」を引き起こす場となるのかを併せて確かめる。

また、今回はコンクリート工を見たが、アレクサンドリアに来る出稼ぎ労働者がどのような職業について、都市で生活しているかを、様々な職業を見ていくことでその全体像を把握する。いくつかの出稼ぎ労働者の職業形態を見ていくことで、彼らの就業傾向とそれらの職業における彼らの互いの関係性を把握し、その職業が彼らを引きつける要因がどこにあるかを探っていく。

出稼ぎ労働者を引きつける要因について、職業だけではなく、場所についても考える必要がある。出稼ぎ選択地として、首都カイロとアレクサンドリアのどちらを選ぶかについて、どのような要因が考えられるだろうか。ソハーグ県人の動向に注目すれば、カイロにも一定以上の同県出身出稼ぎ労働者が来ており[9]、決して選択肢としてアレクサンドリアしかないわけではない。今まで見てきたように、出稼ぎ労働者は、全くの個人ではなく、出稼ぎ先へ何らかの伝を頼って移動している

ことが考えられる。その伝とは、例えば同村出身という単位であるのか、イスラム教かキリスト教といった宗教単位であるのか、アーイラ単位であるのだろうか。そのどの単位で出稼ぎ先を選好し、そこに向かっているかも今後の調査の中で明らかにし、その理由を探る。

さらに、エジプトでは、運河開削や開墾事業などの労働力として、上エジプトより多くの人が動員されてきた歴史がある。彼らのことを一般的にタラーヒール労働者と呼ぶが、彼らがその労働の後も都市部に残り、出稼ぎ労働者の基礎を作ったとも考えられる。今後の調査においては、彼ら出稼ぎ労働者の来歴を聞き取り、タラーヒール労働者と現在の彼ら出稼ぎ労働者のつながりを調べる。

アレクサンドリアの出稼ぎ労働者ネットワークに関する研究は、始まったばかりである。今後、アホワと同郷者団体を軸に、調査を進めていき、彼らの社会的ネットワークの形成過程を考察していく。

注

[1]本稿は、2005年２月23日から３月12日及び、2005年８月17日から10月25日の期間中に、エジプトアレクサンドリアで行なわれたフィールド調査を元にしている。

[2]アラビア語エジプト方言には、家族を指す言葉が二つあり、それがアーイラとウスラ(本文で後述)である。アーイラとは、複数世代の一組以上の婚姻関係にある男女とその子供を含む家族を指す言葉であり、ウスラとは、住居を共にする一組の婚姻関係にある男女とその子供で構成される家族を指す。すなわち、アーイラとは、住居を共にすることが前提条件ではなく、父系の血縁関係によって構成されるので、この関係をどこまでも辿って拡大して捉えることができる家族を表すのである。本稿において、単に家族と書く場合は、ウスラを指すこととする。

[3]教会が同郷者団体の代わりをするのではないかと考えたが、教会は、出稼ぎ労働者にとって、その代わりをすることはなく、祈り、貧者に施しをする場所であるとのことであった。

[4]１エジプト・ポンド≒19円（以下エジプト・ポンドをEPと略記）と計算すると、475円～665円となるが、参考までに、彼ら出稼ぎ労働者が日常的に関わるものの値段を列記すると、この日の昼食が２EP、タバコ2.5EP、アホワでの紅茶がだいたい0.75EP、マイクロバスが0.5EPである。

[5][Abu-Lughod, Janet 1961:25] を参照のこと。

[6]注２を参照のこと。

[7][Abu-Lughod, Janet 1961:23] を参照のこと。

[8]今後の研究として、都市滞在暦と彼らの方言の関係を調査することでこの問題を深化していく。都市の人たちと関わっていれば、方言は弱くなっていくと考えられるが、論者が接見した多くの出稼ぎ労働者は方言が強く残っており、時折理解するのに苦労した。

[9][Kato, Hiroshi, Erina Iwasaki and Ali El-shazly 2004: 200] を参照のこと。

参考文献

Abu-Lughod, Janet. 1961 "Migrant Adjustment to City Life: The Egyptian case", *American Journal of Sociology* 67, pp. 22-32.

el-Aswad, El-Sayed 2004 "Viewing the World through Upper Egyptian Eyes: From

Regional Crisis to Global Blessing", In Hopkins, Nicholas S, and Reem Saad, *Upper Egypt Identity and Change,* The American University in Cairo Press, pp. 55-78.

Kato, Hiroshi, Erina Iwasaki and Ali El-shazly 2004 "Internal Migration Patterns to Greater Cairo –Linking three kinds of data: census, household survey, and GIS-", *Mediterranean World XV II*, the Mediterranean Studies Group, Hitotsubashi University, pp. 173-212.

大塚和夫　1983 「下エジプトの親族集団内婚と社会的カテゴリーをめぐる覚書」『国立民族学博物館研究報告』第8巻3号、国立民族学博物館、563-586頁。

岡戸真幸　2005 「アレクサンドリア調査研究ノート」私市正年（研究代表者、上智大学・外国語学部・教授）編、平成１４年度～平成１６年度科学研究費補助金（基盤研究B- ２）研究成果報告書『現代イスラーム地域における民衆と宗教運動の総合的比較研究―歴史的背景と社会的実態の調査、分析―』、185-192頁。

加藤　博　　1983 「近代エジプト農村社会研究のためのノート」『東洋文化』63、東京大学東洋文化研究所、211-236頁。

加藤　博　岩崎えり奈 2005 「エジプトにおけるマイグレーションと地域類型－三種類のデータ（センサス統計・世帯調査データ・地理情報）を接合する試み－」『東洋文化研究所紀要』第百四十七冊、東洋文化研究所、1-65頁。

店田廣文　1984 「エジプトのスラムの実態　ムハンマド・ハサン・ガーミリー著『貧困の文化－都市開発人類学的研究－』」『アジア経済』(25) 4、アジア経済研究所、147-155頁。

長沢栄治　1980 「エジプトの移動労働者」『アジア経済』(21) 11、アジア経済研究所、57-75頁。

1991 「都市化と社会的連帯　－上エジプト農村とアレキサンドリア市港湾労働者社会の事例比較－」加納弘勝編　『中東の民衆と社会意識』アジア経済研究所、211-262頁。

野元美佐　2005 『アフリカ都市の民族誌　カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』明石書店。

ファウラー、エドワード 1998 『山谷ブルース－「寄せ場」の文化人類学』洋泉社（Fowler, Edward., 1996, *SAN'YA BLUES*, Cornell University Press)。

大東文化大学大学院アジア地域研究科
アジア地域研究専攻博士課程前期課程
2004年３月修了
（現　上智大学大学院　外国語学研究科
地域研究専攻　博士後期課程）